

僕は後悔していない・・・・・・・・・・・・・・・・・・

574

萩原良昭

## 僕は後悔していない

それを見て、僕は、咄嗟に、僕の右の、  
彼女のすぐ隣りにある椅子に飛び移った。  
彼女の顔が僕の目の前になつた。

僕が、急にそばに来たので、  
彼女は一瞬、困った顔になつた。

僕が、抱きつき、くつついで來るのも、  
と思ったのか、それとも、単に、  
初対面礼儀として、僕と距離を置くためか、  
彼女は、ゆっくりと、僕の表情を確かめながら、  
避けるように、右隣りの椅子へ移動した。

庭を正面に見る、今の僕の椅子からは、  
その彼女の今度の椅子は、僕の正面にある。

庭を後ろにして、彼女は座ることになり、  
ガングン照る庭を背にして、  
彼女は僕を真正面に見た。

逆光に彼女の髪の毛が  
黒いシルエットになり、風に揺れた。

僕はその瞬間、絵を見ている気持ちになつた。

八幡町の印象は僕には非常に強かつた。

まだ、小学校に入る前、近所の人たちと、  
町内遠足で連れられて来たことがある。

あの時、炎天下、土手のそば下で、  
氷をやっている店の前で、僕は順番を待っていた

591